

憬興『觀經疏』復元の試みとその思想的意義について

中 村 玲 太

一 はじめに

新羅浄土教は、近年の研究が示すように（愛宕「二〇二二」等参照）、『觀無量寿經』（以下、『觀經』と略記す）を受容しなかつたわけではないが、中国唐代の浄土教に比して『觀經』に対する注釈書は極めて少ない。そのような新羅浄土教の中において注目されるのが、憬興（くわんこう）が中国浄土教諸師の影響を受けつつも独自の観点から、『觀經』に対する注釈書（便宜上以下、『觀經疏』と記す）を遺していることである。

ただ、この憬興『觀經疏』は、すでに散逸しており、日本の文献における引用からその存在が知られるという状況である。この逸文について、渡辺「一九七八」にて復元が図られている。しかし、渡辺氏の復元は主として良忠（一一九九～一二八七）撰述の『觀經疏伝通記』の引用に依っているが、十分な逸文蒐集がはかられているとは言い難い。なぜなら、筆者が現状確認する限り、憬興『觀經疏』を最も多く引用して

いるのは道教顕意（一二三八～一三〇四）撰述の『觀經疏楷定記』（以下、『楷定記』と略記す）であり、『楷定記』には他には見られない多くの逸文がある。そこで、『楷定記』を中心として憬興『觀經疏』の更なる復元を試み、『觀經疏』から知られる憬興独自の浄土教思想の解明を期すものである。

二 憬興『觀經疏』の形式——文前の「九門」——

『楷定記』には憬興『觀經疏』の構成に言及している箇所がある。以下、憬興『觀經疏』の引文と顕意の註（以下へ）内は顕意の註（割註）を表す）である。

憬興云、第五所觀假実門。（彼於十六妙觀文前、聊作九門。是其第一）有説、日水像觀為假。餘皆是実。此必不然。

（西全七・三六九上 以下すべて『楷定記』からの引文であり〔※『楷定記』中の「憬興云」とは『觀經疏』を指す〕、西全の巻数と頁数のみ記す）

顕意の註に依れば、憬興は『觀經』の十六觀を釈す前に「九

憬興『觀經疏』復元の試みとその思想的意義について（中村）

門」を論じている。渡辺氏の復元本からも『觀經疏』が随文解釈の形態をとることが知られるが、そうした十六觀の逐語的な解釈の前に、憬興が『觀經』を総括的に理解する視座を九つの観点から示していたことが新たに推定される。

三 憬興『觀經疏』の思想的特徴

(一) 凡夫化土往生の問題

憬興の浄土教思想の特徴として、『觀經』に説かれる九品浄土すべてが凡夫を対象とした浄土であると判定したことが挙げられる。こうした憬興の往生思想は従来『無量寿経連義述文贊』（以下、『述文贊』と略記す）から論じられてきたが、まさに九品浄土が分析される『觀經疏』でも問題となり、『述文贊』にはない観点も窺える。

これについて注目すべきが、「憬興云、弥勒問経亦有十念故。彼経云、非凡夫念、非愚人念、非不善念、不雜結使念、具足如是生安樂国。凡有十念。一、於一切衆生常起慈心。如群疑論。如是十念。一次第相續而起、不生彼国、無有是处。有説、彼十念非中下輩之所能行、唯有上品修十行者、得生浄土。此必不然。上品三生既是凡夫。凡夫所修、必不可言非凡夫念。凡夫念若非凡夫者、亦可非不善念亦是不善念故。今即彼経十念、受用土因。此云十念、是化土因。三品九品既生化土衆生階降。故彼十念非此所説。〔已上〕」（七・六一八上〜下）とする

引文である。新羅浄土教で大いに議論され、『述文贊』でも言及される『弥勒問経』であるが、『觀經疏』でも凡夫往生を論じる上で中心の問題となっている。なお、『弥勒問経』は逸文であり諸師の引用からしか知られないものであるが、上記「非愚人念」は諸師中には見られない特殊な引文である。

さて、憬興は『弥勒問経』に説かれる十念が九品における上品の修すべき行であるという説に対して、上品がすでに凡夫である以上、「凡夫の念に非ず」と言われる『弥勒問経』の十念は、弥陀本願の十念には当たらないとしている。ここから、『述文贊』にはない論点として注目されるのが、『弥勒問経』の十念を「受用土」の因、弥陀本願の十念を「(変)化土」の因として論ずることである。こうした記述から、凡夫が修し得る十念とは変化土の因となるものであり、九品浄土が変化土であればこそ凡夫もその因を修して往生が可能である、という基本的な憬興の往生理解が確認できる。梯「一九九四」では『述文贊』の研究から「憬興は第十八願の十念から慈等の十念を排除することによって、この十念の易行性をより強調する」（二〇七頁）と指摘しているが、弥陀本願の十念が『弥勒問経』の十念とは違うことをことさら論じるのは、具体的には九品浄土が他受用土であることを否定することに眼目があつたことがこの『觀經疏』からはじめて理解されよう。

(二) 韋提希凡夫論

『觀經』の主人公である韋提希をどのような存在として捉えるべきかが中国浄土教において論じられてきた。韋提希を高位の菩薩と判じた慧遠を意識して、韋提希凡夫論を説く善導の教説が注目されてきたが、憬興もまさに慧遠を批判して韋提希を凡夫として論じている。

このことについて、まず、「憬興云、有説無生忍者、即七八・九地。此必不然。違下文汝是凡夫。故若言此会即得無生、応知、夫人実大菩薩者、此亦難定。無生法忍亦通方便故。亦無夫人発迹之説故」(七・三二四下)とある。憬興が批判する「有説」とは慧遠の説であると考えられる。慧遠『觀經義疏』では、『仁王經』を根拠に韋提希の得る「無生法忍」を十地中の「七・八・九地」と判定した上で、韋提希は「実の大菩薩」であり、あくまで「化して凡と為る」などと言われる(大正三七・一七九上)。対して憬興は、經文に「汝是凡夫」と言明される以上、韋提希が「七・八・九地」の菩薩であるとは言えない、また、韋提希は本地の発した「迹」であるなどとは經典に一切説かれていないことであり、凡夫に見える韋提希であるが実は大菩薩である、などと断定するのは不可能であると論じている。こうした主張には慧遠の説が念頭にあったと推定される。

また、「憬興釈上光台中云」として引かれる文の中にも、「夫

憬興『觀經疏』復元の試みとその思想的意義について(中村)

人雖凡、是菩薩種故」(七・二八三下)とあり、韋提希を「凡夫」だとする。なお、韋提希は「菩薩種」であるとしているが、憬興における玄奘、基の影響を考えれば、これは法相の理解に基づいた「五姓」中の「菩薩種姓」のことであろう。

憬興は凡夫が往生し得ることを苦心して論じているわけであるが、『觀經』の主役であり浄土願生者たる韋提希夫人が実の「凡夫」であることを明らかにする必要があったと言え、ここに憬興の思想的特徴が表れている。

(三) 唯識思想との関連

憬興に唯識思想の影響があることは従来から指摘されることであるが、憬興がどのような唯識思想の観点から浄土教を解釈していたかについて、その具体的な事例が明示されてきたとは言い難い。そこで憬興の唯識理解について『觀經疏』から提示したい。

憬興の唯識理解を考える上で、『觀經』第八觀の「是心作仏是心是仏」の經文への注釈が鍵となろう。この經文に対して、「憬興云、前云諸仏、即是本質。今此仏者、影像是也。見分觀彼本性仏時、所變相好既是独影。従見種生体即見分。故云是心即是相好。〈乃至〉見分能變化相分仏。故是心作仏。独影之仏体還即心。故是心是仏。〈文〉又上文云、雖知見仏唯見心相、若無諸仏為現其身、自識無由變為報化。託彼本性、變化影像。影像与質、親相涉入。故入衆生心中。〈文〉」(七・四三二上)

憬興『觀經疏』復元の試みとその思想的意義について（中村）

下)と釈を施している。憬興の釈に依れば、主觀の側である見分、つまり「心」が、觀察の客体側である相分、つまり「仏」を變じるのであり、その仏の体はまさしく「心」であるということになる。故に「見仏」とは「見心相」だとする。しかし、諸仏が身を現すからこそ自己意識が現す「影像」も變化し得るのであり、心とその觀察対象、本質たる仏との關係を「親相渉入」として捉えている。憬興は「是心作仏是心是仏」を通して觀察を「見心相」だと喝破していくのであるが、心と仏との關係を一方向的のみに捉えているのではないことが分かる。

しかし、ここで注視したいのは、「独影」ということである。後に「三類境」（性境・独影境・帶質境）が論じられるが、この「三類境」の基盤となる玄奘作とされる偈頌が、「性境不随心 独影唯従見 帶質通情本 性種等随応」であり、基『唯識枢要』（大正四三・六二〇上）が初出と見られる。「独影」とは「唯従見」と言われることから、「これは専ら人間の主觀見分のみで造り出され、客觀的妥當性を缺き本質なきものという。本質なくただひとり影のみの存在なれば獨影境と名づける」（保坂「一九六〇」一六六頁）などと解説される。憬興は後に「今即此觀所變像相、既是独影、未必託質。随心所慮、影現其中故」（七・四二八下）として、本質に依拠しないのが「独影」であることも認めており、基の著作を通して先の偈頌

も知るところであつたのだろう。しかし、憬興はそうした「独影」の認識原理から、本質に依拠しない觀察の在り方も認めているのであり、むしろ「独影」に積極的な価値付けをしているとも言え、ここに憬興独自の展開があるのではないかと考える。

四 小結

以上の検討により、『述文贊』並びに渡辺氏の復元本『觀經疏』からは知られなかった憬興独自の思想が確認できた。ここに本論の意義があると考ええる。ただ、本論はあくまで一部復元した『觀經疏』の紹介であり、『楷定記』並びに他の著作等からの全体的な復元は今後発表していきたい。

〈参考文献〉

- 渡辺顕正『新羅・憬興師述文贊の研究』（永田文昌堂、一九七八）
 愛宕邦康「新羅浄土教における『觀無量寿經』の位置付け——惠
 谷隆戒説への疑問——」（『印度学仏教学研究』第六一巻第一号、
 二〇二二、一九〇〜一九四頁）
 梯信暁「新羅浄土教の展開（二）——十念論に着眼して——」（『印
 度学仏教学研究』第四二巻第二号、一九九四、一〇四〜一〇七頁）
 保坂玉泉『唯識根本教理』（鴻盟社、一九六〇）

〈キーワード〉 憬興、『觀經疏』、顕意、『楷定記』

（親鸞仏教センター研究員）